

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

博物館と美術館：文化を語る二枚舌の構造

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川口, 幸也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4323

博物館と美術館——文化を語る二枚舌の構造

川口 幸也

はじめに

博物館と美術館は、英語にするとどちらもミュージアムだが、日本ではこの二つをわりあいはっきりと区別している。その証拠に、多くの県では県立の博物館と美術館が別々に存在するし、国立の博物館と美術館はたがいに違う独立法人を構成している。当然のことながら、こうした制度面の違いは現場での日常の運営にも影響を及ぼす。一例を挙げると、調査研究や展覧会が、博物館と美術館の垣根を越えて共同で企画、実施されることはあまり多くはない。双方にはともに学芸員と呼ばれるスタッフがいて、分野はともかく、収集、研究、展示と似たような仕事をしているにもかかわらず、相互の交流がほとんど見られないというのは少しばかり奇妙である。

このような制度や運営における両者のずれは、私たちの生活や意識にも微妙な影を落としている。いささか唐突だが、若い恋人たちは初めてのデートの場所としては美術館と博物館のどちらを択ぶだろうか。確証があるわけではないが、おそらく美術館を択ぶ方が多いのではないだろうか。レストラン一つ取ってみても、美術館なら洒落たフレンチかイタリアンもありそうだが、博物館だとそうはいかない。また時代遅れであることを揶揄する言葉に「博物館行き」というのがあるが、「美術館行き」とは言わない。後者だと逆に先端的な響きさえある。どうやら博物館には暗いイメージが付きまとい、一方、美術館にはどこか垢ぬけた印象があるようだ。

1 日本における博物館と美術館

日本におけるこの博物館と美術館の区別はいつごろから始まったのだろうか。周知のように、ミュージアムの訳語に博物館という言葉当了てた最も早い例の一つに、幕末慶応二（一八六〇）年に刊行された福沢諭吉の『西洋事情』がある。だが、それより少し前、万延元（一八六〇）年に日米修好通商条約の締結のためにアメリカに派遣された使節団に通訳として加わっていた名村五八郎元度が、ワシントンで見たパテント・オフィスを博物館と訳したという（椎名仙卓『明治博物館事始め』思文閣出版、一九八九年、二二頁。なお、万延元年の遣米使節には福沢諭吉も加わっていた）。一方、美術館の方はどうかというと、こちらも意外に古い。岩倉使節団の『特命全權大使 米欧回覧実記』（久米邦武編 田中彰校注『特命全權大使米欧回覧実記（五）』岩波文庫、一九八二年、二八頁）では、明治六（一八七三）年にウィーン万博を訪ねた際に見たレンガ造りの

建物を美術館と記録しているし、その後国内でも、明治一〇（一八七七）年に東京の上野で開かれた第一回内国勸業博覧会には「美術館」と名付けられた同じくレンガ造りの洋風建築が登場したことが知られている（木下直之『美術という見世物』平凡社、一九九三年、二四二―二五四頁。椎名前掲書、一六八―一七三頁）。

ワシントンのパテント・オフィスは、その後一八七二年にここを訪れた岩倉使節団の残した絵と記述によると、大理石の大きな建物の中に蒸気船、電信機から日用品、工芸品、美術品にいたるまでを無数に収めた立派な博物館であり（久米邦武編、田中彰校注『特命全權大使米欧回覧実記』⁽¹⁾岩波文庫、一九七七年、二二〇頁。また椎名前掲書、二二二頁。もっとも、ここでは博物館ではなく「褒巧院」としている）、他方、一八七七年の上野の美術館には額に納められた日本画や油彩画、書、版画、陶磁器などが展示されていた（ただし、内国の博覧会のため、油彩画を含めて作者はすべて国内の作家による）。したがって、わが国ではミュージアムという制度が西洋から輸入された当初から、博物館と美術館の違いはほぼ今日と同じように認識されていたということになる。

日本ではこのように区別されている博物館と美術館だが、日本以外の国や地域ではどうなのだろうか。私は、以前、展覧会の折などに出会ったヨーロッパの美術関係者の何人かにこのことを直接尋ねたことがある。けれども、反応はおおむねはかばかしくなかった。というよりも、博物館と美術館の違いという問いそのものがいま一つ理解されなかったようなのである。ただ、ならばヨーロッパでは両者の違いは意識されていないかという点、必ずしもそうでもない。キャロル・ダンカンは、「イギリスではアート・ギャラリーとミュージアムは違うとされているが、アメリカではそのような違いはなく、アート・ギャ

ラリーもミュージアム・オブ・アートも同じだと考えられている」(Carol Duncan, *Civilizing Rituals*, Routledge, 1995, p.1)と書いている。また、手元にあるイギリスのオックスフォード西洋美術事典の日本語版を開いてみると、「博物館と美術館」という項目があつて、次のように出ている。

イギリスでは、「ミュージアム」という言葉には、民族学的、古物研究学的な興味が優先するということ意味合いがあり、彫刻や絵画が陳列されていることをとくに示す場合にはむしろ「アート・ギャラリー」という語が用いられている。けれども、この区別には歴史的な根拠もない(以下略)『オックスフォード西洋美術事典』講談社、一九八九年、七七四頁)。

ちなみに、日本語版で「博物館と美術館」とされている項目名は、英語版では「MUSEUMS AND GALLERIES」となっている。これらを踏まえると、イギリスではミュージアムとギャラリーという形ではあるが、日本でいう博物館と美術館の違いに相当するものがあるらしい。つまり、ブリテイッシュ・ミュージアムは博物館であり、ナショナル・ギャラリーは美術館だということのようだ。

ダンカンがアメリカではそうした違いはないとしているが、これもよく見ると微妙な言いまわしだ。なぜなら、彼女は、「アート・ギャラリー」と「ミュージアム・オブ・アート」の違いはないと言っているのであつて、ギャラリーとミュージアムを比べているのではないからだ。私たちの感覚から言えば、「アート・ギャラリー」と「ミュージアム・オブ・アート」はどちらも美術館と言うべきであろう。やはり、メ

トロポリタン・ミュージアム・オブ・アートは博物館ではなく美術館なのであり、セントラル・パークの反対側に位置するミュージアム・オブ・ナチュラル・ヒストリー（自然史博物館）とは違うと受け止められているのではないだろうか。

2 非西洋では

では、西洋以外の、日本を除くアジア諸国や南米、アフリカといった地域ではどうか。私の勤め先の国立民族学博物館では、毎年、国際協力機構（JICA）から委託を受けて、世界の開発途上国の美術館、博物館関係者を招いて博物館学の研修を行っているが、その参加者に聞いたところでは、これらの地域では、ほぼ日本と同じように美術館と博物館は違うと認識されているようである。もともと、アフリカなどでは、美術館に該当する施設がない国や地域も少なくないという事情はあるのだが。

3 さて……

いずれにせよ、以上をおおまかにまとめてみると、世界じゅうどこでも、多かれ少なかれ博物館と美術館は違う施設であると考えられており、その意識は、欧米よりも非西洋圏の方がはつきりしていると言つてよいのではないだろうか。

しかしながら、この問いかけは一見もつともらしく聞こえるが、じつは注意深く見てみると問題の立て方に少しばかり難点がある。というのは、日本語では博物館と美術館という言葉があるから、私たち

は、この両者がまるで対をなして両雄並び立っているように安易に決め付けがちだが、実際はそれほど単純ではないからである。

美術館というのは、より厳密に言えばアート・ミュージアム、あるいはミュージアム・オブ・アートの日本語訳であつて、美術博物館、つまりは美術を専門に扱う博物館なのである。ということは、ミュージアム、博物館という大きな基礎概念が土台にあつて、その上に、歴史や考古学、自然史、自然科学、動物学、植物学、魚類学などさまざまなディスプレイに基づいた博物館があり、美術史の旗を掲げる美術博物館はそうした数ある博物館の一つに過ぎないのだ。これはつとより早く言えば、博物館という親会社の下に多くの子会社があり、それが歴史を看板に掲げるのなら歴史博物館であり、自然科学であれば科学博物館であり、考古学であれば考古博物館であり、動物学ならば動物園ということになる。ならば、博物館と美術館という問いの設定は、親会社と子会社を比べていることになり、少々筋が違うと言ふべきである。私たちが問わなければならないのは、博物館と美術館の違いではなく、多くの子会社の中でなぜ美術博物館だけが突出して親会社と同等、もしくはそれを凌駕するような扱いを受けるのか、ということではないのだろうか。それはとりもなおさず、美術という概念、または価値が、なぜ特権的に扱われるのかという疑問を提起することにほかならない。

さきに、イギリスにおけるミュージアムとギャラリーを採りあげたが、この両者の違いについても少し掘り下げてみよう。イギリスのギャラリーと言えば、ナショナル・ギャラリーやかつてのテート・ギャラリー（現在のテート・ブリテン）が代表的な存在だが（かつてのテート・ギャラリーは、現在四館に分かれたうちの

一つとしてテート・ブリテンと呼ばれており、テート・ギャラリーという名前の美術館は今も存在しない、これらはどうやら日本という美術館であり、ブリティッシュ・ミュージアムは典型的な博物館だと言うことができる。これらを比べたとき、ギャラリーとミュージアムの最も大きな違いはコレクションにある。

ナショナル・ギャラリーも往時のテート・ギャラリーも、そのコレクションは絵画と彫刻を主とする美術品である。しかも地域で言えば前者はすべてがヨーロッパの美術品であり、後者は、そもそもイギリスの近代美術を収蔵展示するべくナショナル・ギャラリーの分館として開設されたという経緯があるだけに、イギリスの近現代美術を対象としていた。いずれにせよ、両者のコレクションは、イギリスを含めたヨーロッパ諸国の美術品で占められていたのである。

これに対して、大英博物館のコレクションは、足元のヨーロッパのものもあるにはあるが、その大部分は、イギリスが大航海時代にアジア、アフリカ、中南米、オセアニアなど、ヨーロッパ以外の世界じゅうから集めた文物によつて構成されている。

よつてこの三者を見る限り、イギリスでは、自らを含むヨーロッパの文化を語るための施設と、おもに非西洋圏の文化を扱う施設を、美術館と博物館という形で使い分けてきた、と言うことができそうである。ただ、枠取りをより大きく構えて、歴史や民俗をテーマとする小規模な施設にまで目配りをすれば、博物館の中にも、自国やヨーロッパの文化だけを守備範囲とするものがイギリスには珍しくないから、ここはやや慎重に次のように言う方が無難だろう。すなわち、イギリスは、自らを含むヨーロッパの文化を語る施設としては、ミュージアム、博物館のほかにはギャラリー、美術館を用意し、かたや主と

して非西洋圏の文化を扱う施設としては博物館を充てた、と。

ところで、一般に、博物館では収蔵品を標本とか資料、あるいはアーティファクト(モノ)と呼ぶのに対し、美術館では、博物館のそれと区別して美術品(アート)、とりわけファイン・アートと位置付けている。その結果、イギリスでは、アジアやアフリカなど非西洋圏の文化は博物館においてもっぱら標本、資料、あるいはアーティファクト(モノ)によって表され、一方、ヨーロッパの文化は単に博物館で標本や資料、アーティファクトを通して表現されるのではなく、美術館でアート、わけてもファイン・アートによって語られてもきたのである。こうしてみると、対象となる地域によって、文化をめぐる語りのしかけが使い分けられていることに気づく。

じつは、ミュージアムかギャラリーか、あるいはアートを冠しているかどうかという名称の問題を別にすれば、このように文化を語る際に対象地域によって博物館と美術館が便宜的に使い分けられてきたというのは、なにもイギリスに限った話ではない。つい最近まで、イタリア、フランスをはじめ、ヨーロッパの国々では多くの場合そうだったし、いまま事情はさほど変わってはいない。現に、ウフィッツィでもオルセーでも、またプラドでも、ヨーロッパの名だたる美術館は昔もいまもヨーロッパの美術品しか収蔵しておらず、この観点からは、ヨーロッパの文化を語るためにだけ存在する特別な施設だと言えることができる。フランス革命の直後に、歴史上初めて美術に特化した博物館として現れた、いわば美術館の総本山とも言うべきルーヴルにしても、古代のエジプトやオリエント、あるいはイスラム美術も収蔵、展示しているとはいえず、コレクション全体から見たらごく一部に過ぎず、フランス、イタリアなど

ヨーロッパの美術品が圧倒的に多い。もともと、そのルーヴルがアフリカやオセアニア、中南米の「美術」に固く閉ざされていた扉を開いたというのでちよつとした話題になったが、それもつい最近のことである（二〇〇〇年四月に、セッション館が新たに公開された。なお、この展示は、のち二〇〇六年六月に開館したケ・ブランリー美術館のお披露目と位置づけられていたが、ケ・ブランリー美術館は、非西洋圏の「民族美術」を専門に収蔵、展示することを標榜している）。

4 アートの概念

さて、一九九五年、一〇〇周年を迎えたヴェネツィア・ビエンナーレの統括コミッションナーを務めたフランスのジャン・クレールは、あるインタビュに答えて次のように言いきっている——

アートという概念は厳密に西洋のもので、西洋以外の文化にはこれに値するものはない。(Preview:

Venice Biennale 1995 Lauren Sedofsky talks with Jean Clair, *Art Forum*, vol.33, no.8, p.26)

フランスを代表する美術館人の一人で、アカデミー・フランセーズの会員でもあるジャン・クレールのこの発言を、ヨーロッパにおける博物館と美術館の使い分けという歴史的な文脈の中に置きなおしてみると、おそらくそこに、フランスのみならずヨーロッパのアートワールドの一部に根強く共有されている考えがほの見えてくる。それは、アートとその聖堂たる美術館とは、まぎれもなくヨーロッパの文

化を体現しているという考えである。もつと言えば、それは、アートと美術館はヨーロッパそのものだという確信である。だから、多彩な博物館の中で美術博物館が突出しているというのは、そのままヨーロッパの存在が突出しているということなのだ。

なるほど、そうであれば、私たちが無意識のうちに美術館の方がなんとなく明るくてモダンで、フレッチやイタリアンにワインが似合うと思ひ込んでいるのも納得がいく。また、日本や中国、朝鮮、インドなど東洋の「美術」がコレクションの大部分を占め、ヨーロッパの美術は原則として扱わない東京国立博物館が、私たちの目には立派に美術館として映るにもかかわらず、やや遠慮気味に博物館を名乗っていることも頷ける。さらには、日本で初めて常設の美術館を名乗ったのが、一九三〇年に開館した大原美術館であったというのと同じように腑に落ちる。大原美術館には日本や中国、エジプトの美術品も収蔵されていたが、開館に際しての最大の目玉はエル・グレコやゴッガン、モネ、マチスといった西洋近代美術のコレクションだったのである（同館のホームページの年表には、「日本で最初の西洋近代美術館が、倉敷に誕生」と書かれている）。

その一方で、ヨーロッパの人々にしてみれば、もともと自分たちの文化や歴史を語り継いでいくための特権的な価値であり場であるわけだから、アートと美術館が幅を利かしているとしても、とくに障りがあるわけではない。反対に、ヨーロッパ文化の伝道師たるアートと美術館が世界じゅうに普及していくというのはもろ手を挙げて歓迎するべきことであろう。この点を念頭に置くと、だしぬけに「博物館と美術館の違いは」などと訊かれて、彼らの答えが要領を得ないというのも無理からぬ話である。かえっ

てヨーロッパ側から見れば、フライン・アート、つまりヨーロッパ文化の優越性をさりげなく主張し、自分たちの優位を守るためには、博物館と美術館を効果的に使い分けながら、博物館と美術館が違ふ、じつはヨーロッパとそれ以外の地域を区別して、格付けするために二枚舌の構造になっているのだということを気づかれないようにする方が、得策というものだろう。

ダンカンが言うように、アメリカにはイギリスのように博物館と美術館の違いはないのだとしたら、それは、ひとつにはアメリカのミュージアムの歴史がヨーロッパに比べると浅く、組織やコレクションの形成過程も違うということがあるのかもしれない。けれども、移民国家であり、その結果多文化社会であるアメリカでは、建前上そのようにしておく方が、特定の人々にとっては何かと都合がいいという別の理由もあるのではないだろうか。

いずれにせよ、博物館と美術館、わけても美術館は今後ますます世界じゅうに広がっていくことが予想される。両者が、それぞれの国や地域の歴史、文化、風土に根付いていく中で、どのような関係を作りあげていくのか、はたまた現状とは全く違う存在へと変容していくのか、気になるところである。

【読書案内】

松宮秀治『ミュージアムの思想』白水社、二〇〇三年。

ミュージアムやアートの本質が世界を一元化して所有しようとする帝国主義であると、歴史を踏まえて明快かつラディカルに語りきった好著。ミュージアムを論じた書としてはまず出色。同じ著者の近刊『芸術崇拜の

思想』(白水社、二〇〇八年)もお薦め。

ジェイムズ・クリフオード『文化の窮状』(太田好信ほか訳)、人文書院、二〇〇三年。

民族誌、文学、美術と多彩な文化領域を自在に往還しながら、文化を表象する、語ることの政治性、権力性を根源的に批判する。一九九〇年代以降、文化人類学や美術史をはじめとするさまざまな分野の議論に大きな波紋を投じた一冊。